かたりべ 68

豊島区立郷土資料館だより

江戸の名所めぐり ―江戸の昔の面影をたどる―

今年度最初の地域史講座（九月二八日、十月一二日、二六日の全三回）は、「江戸の名所めぐり」と題して、浮世絵に描かれた区内の名所について考えました。

第一回は、開催中の収蔵資料展「浮世絵そぞろ歩き」の見学と、区内の名所について学習しました。区内を描いた浮世絵には、駒込・巣鴨地域と、雑司が谷・高田地域を描いたものが多く見られます。それは、この辺りが江戸時代に賑わった行楽の名所だったからです。駒込・巣鴨地域は、旧中山道が通り人通りも多い上に、植木屋が軒を連ねて花見客を誘いました。雑司が谷・高田地区には、鎌倉街道が通り、鬼子母神への参詣客が行き交いました。浮世絵はこうした行楽地へ誘うポスターとして、また記念のお土産として、需要があったのだと思われます。

第二回は、とても良く晴れて行楽日和のなか、実際に雑司が谷・高田地区に残る江戸時代の面影を辿りました。名所と詩歌とは切り離せない関係にありますが、豊島区周辺にも、「雑司谷八境（ぞうしがやはっけい）」「目白十五景」「高田二十五景」といった漢詩・俳諧・狂歌が伝えられています。「雑司谷八境」は雑司が谷の鬼子母神周辺の景勝地を詠んだ俳諧絵巻です。今では想像もつかない素朴な田園風景が描き込まれています。「目白十五景」は江戸時代には文京区関口にあった目白不動周辺の景勝地を詠んだ漢詩と狂歌です。目白不動は、戦後高田の金乗院に移されて現在に到ります。「高田二十五景」は、現在の学習院構内にあった富士見茶屋から見渡す景勝地を詠（うた）った俳諧です。この日はこれらの詩歌にちなんだ場所を訪ねて江戸時代の名所に想いを馳せました。

第三回は、昔の子どものおもちゃについて考えました。雑司が谷の鬼子母神では、風車、角兵衛獅子、すすきみみずく、紙細工の蝶が売られて、お土産として喜ばれました。また、行楽地を描いた浮世絵は大人のお土産として人気があったでしょう。一方、子どものおもちゃとして描かれた「おもちゃ絵」という浮世絵のジャンルがあります。切りぬいてメンコにしたり、とんとん相撲、きせかえ人形、豆本にしたりして遊ぶことができます。この日は、館蔵のおもちゃ絵のカラーコピーを使って、実際に遊んでみました。

参加者の方のなかには、フィールドワークのコースを、もう一度ご自分で確認しながらたどる方もいらっしゃいました。今後も、いつも見なれた風景を新しい視点から見直すことができるような講座を開催したいと思います。（薬師寺）

雑司谷八境「御嶽夜雪」に描かれる御嶽坂
坂の西南には弦巻川が流れていました。

第二回収蔵資料展

地図・絵図で豊島区を読む　ただいま好評開催中です

現在、郷土資料館では、収蔵資料展「地図・絵図で豊島区を読む」を来年一月一二日までの会期で開催しています。

地図や絵図は、地表にあるさまざまな地理情報を、文字、記号や色彩を用いて一枚の紙に集約したものです。私たちの今日の生活でも、メモ帳に略図を描いたりするように、もともと人々が生活していく上での必要性から生まれ、生活の変化や技術の進歩とともに変遷を重ねてきました。

当館では、一九八四年の開館以来、豊島区地域に関連する地図・絵図類を積極的に収集してきました。今回の収蔵資料展では、収集資料の一部を解説パネルとともにわかりやすく展示しております。

展示構成は以下のとおりです。

Ⅰ　江戸時代以降の絵図
1　江戸図
2　江戸切絵図
3　村絵図
4　各種案内図
Ⅱ　明治時代以降の地図
1　字限（あざぎり）絵図
2　郵便地図と耕地整理図
3　事情明細図と区全図
4　建物疎開図と空襲被災地図
5　千川上水路図

今回の収蔵資料展を通して、地図や絵図にはどのような情報が盛り込まれ、どのようなことを読み取ることができるのか、その面白さを実感していただきたいと思います。初公開となる資料もありますのでどうぞご来館ください（左写真は展示室内列品の様子）。（伊藤）

展示中の駒込村絵図（部分）

＊来館者からの声（11月10日現在）＊

▼雑司が谷に四〇年以上住んでいるが、昔からの変遷が良くわかって面白かった。江戸期のものにもう少し力点を置いてもらえるともっとよかった。【区内居住者、四七歳、男性】

▼貴重な諸資料を、両親・祖父母から聞いた事柄を思い起こしながら拝見させていただきました。この企画を小中学生に見学させながら、地元の高齢者の方々より、当時の町々の風景、人物写真等を含めて説明されると、わが町への愛着がより深まるのではないかと思います。【区内居住者、五〇歳代、男性】

▼とても興味深くみせていただきました。これだけの物を収蔵され続けられていることは大変なことだと感じました。見に来て良かったです。【大阪府居住者、三一歳、女性】

▼多種の地図が良く整理されていて、大層興味深く参考になりました。【板橋区居住者、六五歳、男性】

▼昭和四年の地図に今年度限りでなくなってしまう時習小の印を見て、感無量でした。【区内居住者、五四歳、男性】

10月27日に行った展示説明会のようす

旧田島平良家長屋門所蔵資料の整理・調査事業の中間報告

むかし"農具"・いま"資料"

千早三丁目の田島平良さんの家の長屋門には、農具類が納められていました。最初にその光景を見たとき、豊富な量と種類の多さに驚きました。同家のご理解をいただき、その場の現状調査をした後、一九九八年一〇月、当館へ寄贈していただくことになりました。保管場所の確保等のために、なかなか次の作業に取りかかれませんでしたが、今年の六月から八月にかけて、ようやく整理と調査を始められるようになりました。

◆水遊び？　いいえ資料の洗浄です

鋤、鍬、桶、樽、籠、笊、唐箕、万石、千歯扱き、筵、菰、大八車…。実物がどのようなものか目に浮かびますか？　今夏の記録的な暑さのなか、二人の大学院生が中心となり、まずはこれらの農具のほこりをはたいたり、きれいに洗い流すという作業を行いました。

主に戦前まで、同家では近隣の農家と同じように野菜栽培を行い、市場に出荷していました。畑が次第に宅地化していくなか、一九七〇年頃まで、自給用の野菜作りをしていたのが同家でした。農具は代々使用してきたものばかりで、ひとつひとつを手にするうちに、いろいろなことを考えるようになりました。

"使い込んだのか、鍬の刃先が毀れている。鍬の柄が曲がっているけれど、まっすぐなものよりも使い勝手がよいのだろうか。それとも使っているうちにこうなったのか。桶のタガがはずれている。古くなったからだろうか。それとも今までしまっておいた暗い所から急に明るい所に出して乾燥したからか。樽には紙のラベルが貼られている。鰹節が入っていた樽を、籾殻を保管するために使っていたようだ。平たい笊には、どんな野菜を入れて市場へ持っていったのだろう。きゅうり？　それともみょうが？"

大八車の車輪を洗う。車大工の職人さんの技術は高い。農家では野菜を入れた籠を積み、砂利道を通り、神田の市場へ運んだ。

洗い終えた農具は、まだ現役で働けそうな顔になっていました。

◆とれる？　ピンセットが重宝します

現在、これらの資料は西部区民事務所（元平和小学校）四階の郷土資料館収蔵室に所蔵しています。受入れた後に燻蒸（カビや虫の卵を駆除すること）しているため、生きた虫がついていることはありません。

しかし、今回洗った農具類はほとんどが木製品。農具は長い休眠期間があったので、その時に虫が繁殖していた形跡がみられるものもありました。小麦の大きさを選別する時や粉を挽くときに使用した道具、そしてその保管の容器や蓋には、所々に虫の遺骸がありました。その虫の種類を調べていますので、明らかになったらご報告します。今回、実に根気よく、見えにくいところに隠れていた虫の遺骸をひとつひとつ取り除きましたが、こうした作業も、後世に資料を伝えていく過程のなかで大切なことと感じました。

◆展示室で披露するまであと〇〇〇日

農具は使えば汚れます。また、破損もします。大部分の農具が、修理を繰り返しながら大切に使われてきたことがわかりました。また、使い手ばかりではなく、それを作った職人さんのことも目に浮かびました。さらに、これらの農具の生産地や、誰がいくらで売っていたのかということも気になりました。

ところで、今回洗った農具は豊島区に特有なものか、それとも東京のどの地域にもあるものか。広く関東ではどうか、さらに日本全体を視野にした場合、同じように見える農具でも地域的に違いがあるのではないかといったことを考えるようになりました。今後、農具を通して豊島区域の文化的特徴を知ることができればと思っています。

洗い終えた農具を見ると、実にいとおしい気持ちになりました。資料として展示室でご覧いただくためには、あと少しの時間が必要ですが、その日を励みに次の段階の整理・調査を進めたいと思っています。

（福岡）

四斗樽のラベルは貴重な情報。洗う前にきれいにはがす場合もある。樽の側板やタガの間に巣を作った虫の遺骸を取るときもピンセットが有効。

セピア色の記憶

第3回 「ビックリガード」は何がビックリ？

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ位置から撮影した昭和三八（一九六三）年と現在（平成一四年一〇月三一日）の池袋駅の南側に位置する通称ビックリガード（正式名称：池袋南交差）付近の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、➡は撮影方向を示しています。

みなさんご存じのように、ビックリガードは、池袋駅の東口方面と西口方面とを結ぶ都道二五号線とJR線・西武（池袋）線との立体交差のことを指します。

このガードは、旧国鉄線部分がすでに大正一二年（一九二三）段階で立体交差となりましたが、その時点では西武線（当時武蔵野鉄道）部分は踏切で交差していました。ところが、交通量の増加に伴い、今から四〇年ほど前に西武線もあわせて現在のような形に改良されたものです。

上の写真は、その拡張工事中のもので、昔ながらのタクシーが写っています。また、ガードの背景には西武鉄道ビル（現西武池袋ビル）や、現在は西口にある丸井（池袋東口店）が見えます。西武鉄道ビルの懸垂幕に「第6回　西武園大玉花火大会」と宣伝文句があるので、撮影時期は夏でしょう。拡張前のビックリガードは、下段右写真（昭和三五年撮影）のように車一台がかろうじて通過できるほどの細いものでした。車社会への移行期に実施された拡張工事だったと言えるでしょう。その後昭和三八年一二月に工事は完成し、現在に到っています。

ところで、ビックリガードという呼び名の「ビックリ」とは、何がビックリなのでしょうか？　以下、よく言われている説を掲げておきましょう。

①ガード拡張工事によって生まれ変わった幅員の広い立体交差そのものが、当時は珍しく、それを見た人がビックリ説

②ガード下の排水が悪く、豪雨により水浸しとなり通行不能となるため、そこを通行しようとした人がビックリ説

③荷車を引いた馬がガード下を通る時に、線路を列車が通過すると大音響がするため、通行中の馬がビックリ説

いずれもありがちですが、①はガード拡張後の話、②③はガード拡張前の話と分類できます。やはり、当時の池袋に詳しい複数の方々から、今のうちに聞き取り調査をしておくのが正解のようです。

ちなみに、池袋駅北側の通称ウイロード（正式名称：雑司ヶ谷随道（ずいどう））は、かつて北口側の通路脇にトイレがあり臭ったため、ションベンガードと呼ばれていました。この由来についても、「ガード内に巨大なションベン小僧の置物があったため！」などともっともらしく伝わってしまうのでしょうか？

（秋山）

郷土資料館　なんでもQ&A　地名の由来は諸説あり

Q 豊島区内各地域の地名（町名）の由来について教えてください。

（質問者　ひでき）

A 地名（町名）の由来については、資料館への問い合わせの中で最も件数が多いものです。しかしながら、由来が明確に分かるケースはごくまれで、多くの場合様々な説があったり、まったく分からない場合もあります。そこで、今回と次回の二回にわたり、区内の主要な地名（町名）の由来についてお答えしていくことにします。

【目白】（めじろ）

明治一八年（一八八五）に開業した目白駅にちなんでつけられた地名です。駅名となった「目白」とは、豊島区高田二丁目一二番の金乗院境内に祀られている江戸五不動のうちのひとつ目白不動を指します。もともと目白不動尊は、文京区駒井町（現関口二丁目）に所在した新長谷寺境内に祀られていましたが、この寺が戦災により廃寺となったため、金乗院境内に祀られることになりました。正式な町名として「目白」が登場するのは、昭和七年（一九三二）一〇月の豊島区成立時の「目白町」、（一～四丁目）が最初です。

【池袋】（いけぶくろ）

江戸時代の文政期（一八一八～二九）に幕府によって編集された『新編武蔵風土記稿』では、村の東北部に窪みがあり、その地形が袋状になっていたところから「池袋」という地名が起こったとしています。一方、同じ頃に津田大浄という僧侶が記した紀行文『遊歴雑記』では、昔から広い池があり、当時なお三〇〇坪ほどの広い池であったことから「池袋」という村名がついたとしています。ちなみに、この広い池とは「丸池」のことを指し、十数年前まで西袋一丁目九番二号に所在していました（下写真参照）。

【大塚】（おおつか）

明治三六年に開業した大塚駅にちなんでつけられた地名です。駅名となった「大塚」とは、中世の武将太田道灌がのろしの物見のために築いた七つの物見塚とする説（『新編江戸志』）や、水戸藩邸内の一里塚とする説（『江戸名所図会』）など諸説ありますが、いずれも現在の文京区内にちなむ内容です。豊島区内の正式な地名として「大塚」が登場するのは、この地域に住居表示が施行された昭和四四年が最初で、ＪＲ大塚駅の北側が北大塚（一～三丁目）、南側が南大塚（一～三丁目）となり、現在に到っています。目白の場合と同様に駅名が地名に影響を与えた事例と言えます。

【巣鴨】（すがも）

一六世紀中頃に後北条氏が作成した『小田原衆所領役帳』には「菅面」、また江戸御府内の地図である『延宝江戸図』には「洲賀茂」と記されています。また、大きな池があって鴨が群れ棲んでいたから「洲鴨」になったという説もありますが、確証はありません。いずれにしても、地形や景観の様子から「すがも」と呼ばれるようになったようです。

【駒込】（こまごめ）

享保一七年（一七三二）に成立した地誌『江戸砂子』では、日本武尊が東征のとき、このあたりの林に馬（駒）が集められ木々に繋がれているのを見て、「駒こみたり」と言ったのが地名となったとしています。また、寛政年間（一七八九～一八〇〇）に成立した江戸の地誌『新編江戸志』では、先の『江戸砂子』の説は間違いで、原野で馬（駒）を飼養するところからきており、その傍証として牛込（現新宿区）や馬込（現大田区）の存在を挙げています。さらに、古代に大陸から高麗人が渡来、居住し「駒籠」が転化したとの説もあります

（回答者　秋山）

大正７年（1918）当時の丸池　池の水を汲み出して清掃しているところ

郷土資料館からのお知らせ

★『豊島区立郷土資料館研究紀要　生活と文化』第12号発刊のお知らせ

学芸員・社会教育指導員の日頃の調査・研究成果が収録されています。また、巻末には二〇〇一年度の郷土資料館および旧宣教師館事業報告〔年報〕を掲載しています。ぜひ、ご一読下さい。

◆掲載論考

①人員疎開と家族・家族主義〈青木哲夫〉

②博物館経営論再考〈伊藤暢直〉

③「南蔵院薬師堂建立勧進帳」の構成とその資料的性格〈秋山伸一〉

④豊島区域と浮世絵〈薬師寺君子〉

⑤ぼくがさがした庚申塔〈中島将太・福岡直子（編集）〉

◆販売価格八〇〇円（B5判九六頁）

★収蔵資料展図録『地図・絵図で豊島区を読む』発刊のお知らせ

現在開催中の収蔵資料展「地図・絵図で豊島区を読む」の展示図録です。地図・絵図について興味をお持ちの方、また郷土資料館ご来館の記念としてぜひお買い求めください。

◆販売価格二〇〇円（A4判二四頁）

＊ここでご紹介した刊行物は、郷土資料館のほか、区役所分庁舎A館一階の行政情報コーナーでもお買い求めになれます。

区民のための博物館用語の基礎知識

①特展・企展（とくてん・きてん）

特別展・企画展の略称。通常、博物館施設には、常設展示室と特別（企画）展示室があり、後者のスペースを用いて一箇月前後の会期で、ある特定のテーマに沿って展示を行っている。これを特別展と呼ぶか企画展と呼ぶかは様々で、予算規模等により使い分けられている場合もある。

▽類義語△

特別陳列《略称：特陳（とくちん）》とくに関西方面の博物館で使われる。

▽用例△

A「来年の特展の担当者誰だっけ？」

B「えーっと、今年が松嶋さんだったから、来年は反町さんだよ…。」

編集後記

今年は冬の訪れが早いようです。暑い夏から秋を飛び越えて、一気に寒い冬が…。そんな感覚の今日この頃ではないでしょうか？

『かたりべ68号』をお届けいたします。今号より「**区民のための博物館用語の基礎知識**」を掲載いたします。これは博物館業界内で難解と思われる用語を解説するミニコラムです。ただし、お願いですからあまり真剣に読まないで下さい。

収蔵資料展「地図・絵図で豊島区を読む」は、おかげさまで多くの来館者を迎えております。来年一月一二日（日）までの会期ですので、まだ見学されていない方はお早めにご来館ください。

（あき）

かたりべ
・
No.68
・
2002年11月30日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話 03-3980-2351